〈資料〉

ドイツの主要なイスラム組織

近　藤　潤　三

筆者は先に現代ドイツのイスラム組織とイスラム主義問題に関する概観を試みた。それが本号に掲載した論考である。それを脱稿したのは2004年11月であり、その後、手を加える機会がないまま１年以上が過ぎたが、その間にも先進国サミット開催中の2005年７月７日にロンドンで多数の犠牲者を出すテロ事件が発生するなどしてイスラム原理主義やイスラム主義の脅威が強まり、マスメディアでも話題とされることが頻繁になった。わが国の場合、テロ関連では『中央公論』2005年10月号の山内昌之「西欧のテロとイスラームの間」と、同じく『世界』2005年10月号掲載の内藤正典「和解なき衝突への道」が代表的なものであろう。ドイツではわが国よりも遥かに多くのムスリムが暮らしているところから衝撃が極めて大きかったのは当然であり、例えば2004年３月にマドリッドで起こったテロ事件の激震を受けて、同年７月に成立した移民法に当初は予定されていなかった治安確保のための規定が急遽盛り込まれた。また最近では過激なイスラム主義団体として知られる「カリフ国家」のいわゆる「憎悪の説教師」の国外追放や、バーデン＝ヴュルテンベルク州での帰化審査におけるいわゆる「イスラム・テスト」の是非が話題になっており、さらに「スカーフ問題」をめぐる議論が依然として収まっていないのも同じ流れにある。

そうした関心の高まりを背景にして、ドイツでは学術的な調査や研究も一段と活発になってきている。2004年にトルコ研究センターはノルトライン＝ヴェストファーレン州に在住するトルコ系移民に関する調査を実施したが、その要点を同年7月に『シュピーゲル』が報じて不安を掻き立てた。というのは、「信仰への逃避」という見出しで、トルコ系住民の間でイスラムという意識が強くなっていることが浮き彫りにされたからである。すなわち、トルコ研究センターの調査結果からは、「非常に信仰心がある」と答える比率が2000年の一桁か

ら2003年に約20%に増大し、「どちらかといえば信仰心がある」とする者も増加したことが明らかになったのである。もっとも、記事にはこの点についてのセンターのコメントもつけられている。それによれば、「新たな信仰心で問題になるのは、トルコ人というアイデンティティというよりは、むしろ文化的イスラム的アイデンティティであり、それは所長のシェンの見方ではイスラムに対するドイツ人の嫌悪への反応として理解されるべきものである。」[1]

このような補足が付け加えられていたとしても、イスラム意識が強くなりつつあるといういささか衝撃的な事実の前では、それにあまり注意が向けられなかったとしてもやむをえなかったであろう。おそらくそうした事情を顧慮して同センターは2005年にも類似の調査を行っている。報告書は『ドイツにおけるトルコ系ムスリムの宗教的実践と組織的代表』と題して同年11月に公表されたが、これにより、自分を信仰心があるとする者は2000年の73%から83%に増加したことが明らかにされ、再びイスラム・アイデンティティの高まりが確認される結果になった。なかでも「非常に信仰心がある」との答えが7.6%から28.1%に上昇しているのが最大の注目点になっている[2]。また同時期に『平行社会への発展?』と題する調査報告書も発表されたが、そこでは表題からも分かるように、セグリゲーションの問題に焦点が当てられた。そして若いトルコ系移民を対象にして、ドイツ人との交流が拡大していないことや職場などでの差別経験が増えつつあることなどが確認される一方で、それにもかかわらず、交わることのない「平行社会への大規模な発展や、生活を包み込む孤立し閉ざされた集団の存在を語ることはできない」と結論づけられている[3]。

連邦政治教育センターが発行する週刊新聞『Das Parlament』の付録『政治と現代史から』は本年（2006年）最初の号で「平行社会？」というテーマを掲げているが、これも同一線上にあるのは明白であろう。とくに巻頭に文化の衝突や極右など幅広い研究で著名な社会学者W.ハイトマイヤーたちの共同論文が載せられているのは、セグリゲーション問題の中心がイスラムにあることを端的に示している。というのも、その論文は、「広がるイスラム批判によるムスリムの自閉？」と題されているからである[4]。さらに同センターが学校など

に配布する出版物の中でもイスラム関係の著作が増加してきており、社会での漠然とした不安感の高まりを前にして、政治教育の立場から正確な情報を伝えることによって誤解や偏見を解く努力を強めていることが窺える。

このように、ドイツでは実情を正確に把握し、あるいは無用な不安を除去する取り組みが見られるが、その反面で、イスラムに対する恐怖心を強めるような議論が展開されているのも見逃せない現実である。それを象徴するのは「イスラムファシズム」もしくは「イスラモファシズム」という語が造られ、論壇で飛び交うようになってきたことであろう。この概念の内実は定かではないし、そもそもそれが概念として成り立ちうるか否かも疑問だから、むしろ敵と味方を分ける政治用語ないしはレッテルとして理解するのが適切であろう。この視点に立てば、イスラムファシズムというのは、イスラム主義とファシズムの間に共通性を見出し、ヨーロッパ文明を擁護する立場からこれらを一括して排除しようとする考え方だといってよいであろう。いずれにせよ、この造語の不当性を批判する立場からの議論を含め、そうした言葉がドイツを代表する高級紙でも取り上げられるようになっているのは、軽視できない動きだといわねばならない。目に付いた若干の例を挙げれば、2004年３月24日付『南ドイツ新聞』にP.シュタインベルガーの筆になる「イスラモファシズムという観念は馬鹿げているか?」と題した論説が掲載され、同年５月８日の同紙にもS.ヘガシィとR.ヴィルダンゲルの連名で「イスラモファシズムという概念は歴史的に正しくない」とのタイトルで批判論文が寄せられている。さらに2004年3月18日付『ツァイト』や2005年９月21日付『フランクフルター・アルゲマイネ』紙にも同じテーマで論説が掲載されている(5)。因みに、歴史家論争でも知られるE.ノルテがこの議論に登場していることも付け加えておこう(6)。

こうした実情を背景にして、上記の連邦政治教育センターは、印刷物ばかりではなく、インターネット上でもドイツのイスラムに関する情報を提供している。以下で紹介するドイツのイスラム組織の一覧はその一部であり、フリードリヒ・エーベルト財団の研究員であるヨハネス・カンデルが作成したものである。すなわち、Johannes Kandel, Islamische Organisationen im Uberblick,

2005がそれであり、http://www.bpb.de/themen/F9WKLB,0,0で公開されている。前述の拙稿で触れたものとは団体の名称が一部で異なっているほか、人員などにも相違があるが、正確な把握が困難な事情を考慮すれば、違いが残るのはむしろ当然というべきであろう。そうした理由から、その他の点での違いも含め、拙稿に合わせる形での訂正は行わなかった。また僅かではあるが表記が不正確と思われるので省略した箇所もある。その意味では、この紹介は完全な形での翻訳ではない点に留意していただきたいが、拙稿を補う面で有意義であるのは間違いないであろう。

(1) Der Spiegel, Nr.31, 2004, S.17.

(2) Stiftung Zentrum für Türkeistudien, Religiöse Praxis und organisatorische Vertretung türkischstämmiger Muslime in Deutschland, Essen 2005. S.20.

(3) Dies., Entwicklung zur Parallelgesellschaft? Essen 2005, S.21.

(4) Jürgen Leibold, Steffen Kühnel und Wilhelm Heitmeyer, Abschottung von Muslimen durch generalisierende Islamkritik? in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B1-2/2006.

(5) Josef Joffe, Die Offensive des Islamo-Faschismus, in: Die Zeit vom 18.3.2004.; Jan-Werner Müller, Mobilisierende Gewalt in der Verständnisfall, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 21.9.2005.

(6) Ernst Nolte, Der heutige Islam - im Angriff oder in der Verteidigung, ein Vortrag vom 6.11.2004.

ドイツの主要なイスラム組織一覧

組　織　名	設立年度	主たるエスニック・グループ	加盟協会数・人員
宗教施設トルコ・イスラム連盟（DITIB）	1982年ないし1984年	トルコ人	860のモスク協会、13万人
ドイツ・アレヴィト派教区連合（AABF）	1990年ないし1995年	トルコ人、クルド人	95の加盟協会、約３万人
ドイツ・ムスリム中央評議会（ZMD）	1994年	トルコ人、アラブ人、ドイツ人、ボスニア人など	19の加盟協会、約２万人
イスラム評議会	1986年	トルコ人、若干のドイツ人とボスニア人	27から32の加盟協会、その中に大抵の「イスラム連合」と「ミッリー・ギョルシュ」を含む、会員数不明
イスラム文化センター連盟（VIKZ）	1973年（ケルン・イスラム文化センター）、1980年以降イスラム文化センター連合	トルコ人	スーフィー運動、約10万人の協会・教区メンバー
イスラム共同体「ミッリー・ギョルシュ」（IGMG）	1976年	トルコ人	16の州組織、約３万人（ヨーロッパ全体で８万７千人）
ヨーロッパ・トルコ・イスラム連盟（ATIB）	1988年（「灰色の狼」からの分裂）	トルコ人	ドイツとヨーロッパで122の協会、約１万１千人
ヌルジュ運動	1979年	トルコ人	サイート・ヌルジュの教えに従うスーフィー（神秘主義）運動、30の教学施設、500～600人
フェタラー・ギュレン運動	1990年代	トルコ人	約70の教育施設、最も有名なのはデュッセルドルフのツェレ教育センター、会員数不明
ドイツ・イスラム共同体（IGD）	1958年にモスク建設グループから発展、1982年以降IGD	アラブ人、ドイツ人	10の下部組織、主要なイスラムセンターはアーヘン、ブラウンシュヴァイク、マールブルク、ミュンヘン、フランクフルト、ケルン、約１万人

組　織　名	設立年度	主たるエスニック・グループ	加盟協会数・人員
ヘッセン・イスラム宗教共同体（IRH）	1994年（ヘッセン・イスラム活動サークル）、1997年以降IRH	トルコ人、アフガン人、ボスニア人、アルバニア人、バングラデシュ人、パキスタン系ドイツ人	122のローカルグループ、約11000人の個人会員
アーマディヤ・ムスリム共同体	1924年ラホール・アーマディス、1949年クヴァンディ＝アーマディス、1988年以降アーマディヤ共同体	パキスタン人、ドイツ人	フランクフルトに本部、重心はハンブルク、ヘッセン、ベルリン、５万人
ドイツ・ボスニア・イスラム教区連合（VIGB）	1994年	ボスニア人	30～40の加盟協会、会員数不明
イスラム・アルバニア・センター同盟	1993年（1982年に設立された文化センターから発展）	アルバニア人	協会数・会員数とも不明
シューラ・ハンブルク	1999年	トルコ人、アラブ人、ドイツ人	40の協会、会員数不明
シューラ・ニーダーザクセン	2002年（「イスラム宗教授業活動サークル」から発展）	トルコ人、アラブ人、ボスニア人、パキスタン人、イラン人、ドイツ人	50の協会、直接および間接会員、会員数不明
ドイツ・ムスリム連合（ハンブルク）	1952・1954年	ドイツ人	会員数不明
ドイツ・ムスリム連合（ボン）	1989年（ドイツ・ムスリム連合(ハンブルク)から分裂）	ドイツ人	会員数不明

（注）表の中で「ドイツ人」というのは、ドイツ語を母語とする者の意味であり、帰化した「外国人」は含まない。